
特集：新型コロナウイルス感染症と社会保障

ポストコロナに向けた子どもたちの学校生活の現状
——2022年6月の学校生活調査の結果と予備的解析——高久 玲音^{*1}, 王 明耀^{*2}

抄 録

本論文では、コロナ禍の子どもたちの日常性の恢復を考える上での基礎的資料として、学校の感染対策や子どもたちの学校生活の満足度に関する独自調査の結果を報告する。得られた知見としては3つある。第1に、長らく続いたコロナ禍の影響として、「これからずっとマスクをつけていたい」という児童の割合は場面によっては30%に上った。第2に、マスクの着用などの感染対策を緩める施策は子ども達の学校生活への満足度を高める効果を持っていた。最後に、「座学の時間」において「マスクを外しても良い」と先生から指導を受けた場合には、一部の生徒の間では先生の意味に反してマスクの着用意向がむしろ上昇した。これらの結果は、子ども達の中に感染対策が既に習慣として根付いていることを前提に、学校における感染症対策の在り方や日常性の恢復について考える必要があることを示しているだろう。

キーワード：学校，マスク，黙食，満足度

社会保障研究 2022, vol.7, no.3, pp.224-235.

Ⅰ はじめに

2020年2月から続くコロナ禍は子ども達の日常と学校生活を一変させてしまった。安倍首相（当時）は2月27日に感染拡大を受けて小学校以上の一斉休校を要請し、その要請に従って3月2日から順次全国の学校が休校となった。萩生田大臣が2月25日の会見で明らかにしている通り、臨時休校の判断は教育委員会等の学校設置者にあり、法令上内閣総理大臣にその権限はない。3月2日の時点で全国の感染者数は14人に過ぎず、多くの感染症専門家もそうした措置の感染抑制に対する効果を

疑問視した。こうした専門家の意見をよそに、ほとんどの自治体で臨時教育委員会は開催されず、準備期間も十分にとれないままに法的根拠のない安部首相の「要請」に応じて休校は始まった（末富 2022）。多くの国で感染状況に応じて地域的な休校から徐々に導入していき、爆発的な感染拡大によってはじめて全国的な休校に踏み切ったこととは大きく異なる意思決定と言わなければならない（*Global Monitoring of School Closures Caused by COVID-19 Pandemic - Dashboards - Covid-19 Response*; Takaku & Yokoyama, 2021）。

わが国の第一波の対応については、その後、多くの研究が明らかにした通り、感染抑止効果は認

^{*1} 一橋大学経済学研究科 准教授^{*2} 一橋大学経済学研究科 博士課程

められず (Fukumoto ほか, 2021; Iwata ほか, 2020), 子どもの体重増加や育児方針に悩む母親の増加といった副作用も確認された (Takaku & Yokoyama, 2021)。学力についての研究は少ないが, (Asakawa & Ohtake, 2022) は学校行事の縮小による授業時間の増加などによって, 平均的には学力への悪影響は見られないものの, 社会経済的地位の低い層の子どもでは学力が低下したとしている。

第一波の休校が終わっても, 子どもたちの学校生活は平時へ戻ることはなかったし, いまだに戻っていない地域がほとんどである。感染には波があることから, 海外では感染縮小期と拡大期にメリハリをつけた対策が重視され, 日本でも緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置が出されていない期間では一時的に大人たちは日常を取り戻していたが, 多くの学校では感染状況と関係なく2年以上黙食が続けられた。合理性に乏しいと思われる感染対策でも, 「子ども相手」であれば実施していた。例えば, 筆者の一人の子どもの小学校では「鼻にマスク」をつけた状態でのリコーダー演奏が推奨されており, 保護者が見ている学芸会のときには「特別」にマスクをしまつてリコーダーを吹くことが許されていた。水泳で体を洗うときもマスクを着用している学校もあった。接触感染を防ぐために, 滑稽なほど長いバトンを使った徒競走も行われた。学校以外でも, 例えば, 流しそうめんを参加した子どもたち全員で「食べずに見送る」といった行事も催された ((NHK, 2020))。こうした感染対策は無論感染を「拡大」させるわけでもなく, 子どもに直ちに明らかな悪影響があるわけでもないだろうが, 子どもの尊厳にかかわるのではないだろうかという懸念がある (Shobako 2022)。

筆者等の考えでは, こうした2020年2月以来の学校の感染症対策の顕著な特徴は, 当事者の不在である。感染症対策も感染症の専門家に決めてもらえば良いと考えがちだが, 専門家の知見を参照にしつつも当事者がすべて遍く参加した形の集合的意思決定は重要と思われる。こうしたリスクに関する意思決定・共有の在り方は, リスク・コ

ミュニケーションの専門家によって提唱されている。例えば, 吉川 (2022) によれば, 「リスクに対する知識は専門家が持っているのだから, 専門家に決めてもらえば良いのではないか」という見解はしばしば, 驚くような社会的帰結をもたらすという。その典型的な例はBSE (いわゆる狂牛病) だということ。BSEでは10代の若者2名の変異型ヤコブ病の発病など, BSE感染牛の部位を食べることと変異型ヤコブ病の発病の間の関係性を示唆するエビデンスが出てきているにもかかわらず, 専門家は「リスク・ゼロ」を一般国民に主張し続けた。こうしたリスク・コミュニケーションは一般国民の不安を増大させる結果となり, 結局, 欧州の牛肉市場を崩壊させるほどの混乱をもたらした。

コロナ禍における学校の感染症対策にみられる混乱にも, 専門家も間違えることがあり, かつ専門家の主張が関係者のすべての意見を代弁するわけではないという点で類似性が指摘できる。コロナ禍において, 感染症対策の専門家は基本的に「夏休みが終わって学校が始まると感染が拡大する」といった学校生活と感染症の増減に関する見解を表明する一方で, 感染対策の副作用や感染対策の結果としての「子どもの権利の軽視」については逆に専門的見地を守ってコメントを避けてきた。しかし, こうした専門家と世論を取り巻く環境は, 感染対策にともなう広範な影響が政策決定に十分に反映・考慮されにくい素地を醸成してしまった。特に, 「感染のリスク」については感染症対策の専門家が最もよく理解しているはずだが, 「感染対策を続けるリスク」については子ども達自身やその保護者のほうがよく理解している可能性がある。その観点から, 長きにわたるコロナ禍のどこかで, 視野を広げた意見聴取の機会が頻繁に持たれるべきだったかもしれない。例えば, 全般的なマスクの着用には感染対策としての十分なエビデンスが存在するが (Abaluckほか, 2022; Budzyn ほか, 2021; Krishnamachari ほか, 2021), 「体育の時間に外していいのか」といった個別具体的な場面での十分なエビデンスは作ることができない。そうしたエビデンスの限界を踏まえても, 学校生活における感染症対策にかかわる

さまざまな意思決定に「当事者」を参加させる必要性は高かった。

筆者等の専門を離れたリスク・コミュニケーションの在り方以外にも、古典的な医療政策論の文脈からも、当事者への意見聴取は必要と思われる。医療政策論の古典であるHarvard大学のHiaso等の“Getting health reform right”(2003)でも医療政策全般の目的として①健康 (health status)、②リスク保護 (financial risk protection)、に加えて③市民の満足度 (citizens' satisfaction) が挙げられている。通常の経済学研究では市民の満足度に関する影響評価は捨象される傾向があるが、あえてHsiaoたちは「専門家が好きかどうかに関係なく、市民のすべての政策に対する反応が考慮されるべき」だとしている。加えて、HsiaoたちにはWHOの主張する「正当な満足 (legitimate satisfaction)」のみを考慮すべきだという立場はとらないと明記している点も注目値する。そうした観点からも、感染症リスクを制御するのに必要な医学的要請にとらわれない、広く子どもたちの厚生にかかわる要因が検討される必要があった。

以上のような問題意識に基づいて、我々は子どもやその保護者が学校で行われている感染症対策についてどのように思っているのか明らかにすべく、2022年6月末にアンケート調査を行った。2022年6月末は感染が急拡大した第7波の前の比較的感染が落ち着いていた時期の調査であり、ポストコロナの学校の感染症対策の在り方についても一定の示唆を持つものと考えられる。以下では、その結果の概要と得られた知見について説明したい。

II 調査概要

調査は2022年6月に株式会社クロスマーケティング社を通じて行われた。調査対象者は小学校4年生から高校3年生までの児童とその保護者であり、各学年556人に回答者が達するまで続けられた(調査期間は6月22日～6月26日)。研究に際して一橋大学HIAS Healthからの研究資金の補助を受けた。合計回答数は5004人(556人×9学年)で

ある。調査項目は居住都道府県等の基本属性に加えて、「体育の時間」などの個別具体的な場面におけるマスク着用状況、及び、マスク着用の意向(e.g.,「これからもずっと外したくない」)を尋ねた。加えて、基本的な感染対策の徹底度を明らかにするために、先生からの感染対策の指導の状況についても尋ねた。例えば、授業中でもマスクを外して良いという指導があったかについては、以下のように尋ねた。

「あなたが一番年上のお子さんは、先生から以下の学校の時間について「マスクを外しても大丈夫だよ」と指導されたことが最近1週間の間にありましたか。該当する時間がなかった場合には「わからない・覚えていない」とお答えください。/授業中(国語や算数などの座学の時間)」

マスクの着脱に関する指導とともに、昼食の時間における黙食の実施状況についても調査した。こうした感染対策が子どもの学校生活の満足度を与える影響を明らかにするために、学校生活の満足度についても「すごく楽しい」など5段階の回答項目からの選択式で尋ねている。

そのほか、学校の基本属性については、感染症の流行はクラスサイズによっても影響されていること(Oikawaほか, 2020)を踏まえてクラスの児童数を調査した。また、学校での感染対策が校長先生の属性によって影響されるのか明らかにするために、校長先生の性別を尋ねた。

なお、回答に際しては、最初に子ども自身の意向を尋ねる質問があることから、子どもと一緒にいるときに回答してほしい旨をお願いしている。もちろん実際に子ども自身が回答を選んでいるとは限らない点に注意する必要があるが、できる限り当事者(子ども)の意見を吸い上げることを意図した調査設計となっている。

III 感染対策に関する子どもの意向

1 マスクの着用意向

最初に、記述統計を確認することによって、まず学校でどのような感染対策がなされているのか、ならびに子どもたちがマスクの着用のような

表1 子どもたちはマスクを着けていたいのか/外したいのか

具体的場面	回答	平均	標準偏差	最小値	最大値
a. (学校以外の場所で) 屋外にいる場合	これからもずっと外したくない	0.18	0.38	0	1
	外したい/既に外している	0.18	0.38	0	1
b. 電車等の公共交通機関を利用しているとき	これからもずっと外したくない	0.29	0.45	0	1
	外したい/既に外している	0.10	0.30	0	1
c. 図書館など静かな公共スペースを利用しているとき	これからもずっと外したくない	0.27	0.44	0	1
	外したい/既に外している	0.10	0.30	0	1
d. コンビニエンスストアなど屋内で買い物をするとき	これからもずっと外したくない	0.29	0.45	0	1
	外したい/既に外している	0.10	0.30	0	1
e. 学校の授業中(国語や算数などの座学の時間)	これからもずっと外したくない	0.25	0.43	0	1
	外したい/既に外している	0.12	0.33	0	1
f. 学校の授業中(体育の時間)	これからもずっと外したくない	0.12	0.33	0	1
	外したい/既に外している	0.31	0.46	0	1
g. 学校の授業中(音楽の時間)	これからもずっと外したくない	0.19	0.39	0	1
	外したい/既に外している	0.19	0.39	0	1
h. 学校の登下校の時間	これからもずっと外したくない	0.20	0.40	0	1
	外したい/既に外している	0.19	0.39	0	1
aからhの合計値	これからもずっと外したくない	1.79	2.87	0	8
	外したい/既に外している	1.28	2.35	0	8

注：観測値数は5004。

感染対策についてどう思っているのか確認したい。表1は、8つの具体的な場面におけるマスクの着脱の意向について、子どもたち自身の解答をまとめている。回答は「既に外している」「もう外したい」「そろそろ外したい」「いずれ外したいが今ではない」「これからもずっと外したくない」の5項目から選ぶ形となっている。

表1はこの回答項目から「これからもずっと外したくない」を選んだ児童の割合と、「既に外している」及び「もう外したい」を選んだ児童の割合をまとめた。表1で注目すべき点は、場面によらず「これからもずっと外したくない」と答えた児童が10%から30%と少なくない割合で存在することだろう。特に、電車や公共交通機関では29%の児童がそう回答しており、コロナ禍の収束にかかわらず公共交通機関でのマスクは継続して着用されるとみられる。学校においても、体育(12%)や音楽(19%)の時間はやや割合が低下するものの、座学の時間では25%が「これからもずっと外したくない」を選択しており、「もう外したい/既に外している」と回答した児童の2倍に達した。こうした回答の傾向は、長らく続くコロナ禍でマスクの着用に慣れてしまった児童が多くなってい

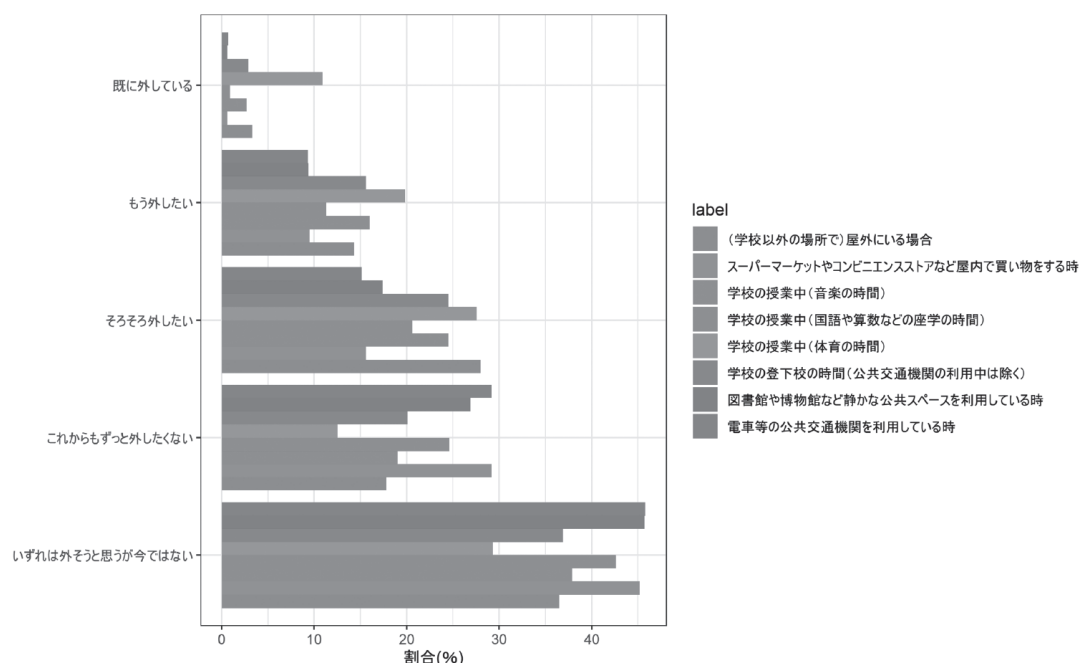
ることを反映していると思われる。

図1は回答項目別に割合をプロットしている。みると、場面によらず、最も回答が多いのは「いずれ外したいが今ではない」と答えた児童が多い。調査時期が第7波の前だったことから、感染収束期での調査といえども児童は慎重な回答を選択していると思われる。また、「これからもずっと外したくない」を選んだ児童の割合は、「そろそろ外したい」を選んだ児童の割合とおおむね同じ程度だった。

最後に分析上の便宜のために、8つの場面のマスク着用意向の合計値を「外したい」「外したくない」という回答のそれぞれについて算出した。個別の場面における回答の傾向を反映して「外したくないスコア」(1.79)は「外したいスコア」(1.28)よりも高い値となった。

2 そのほかの記述統計

そのほかの記述統計量については表2にまとめた。まず学校生活の満足度について尋ねたところ75%の児童が学校生活全般については「すごく楽しい」もしくは「楽しい」と回答していた。個々の授業について聞いてみると、おおむね50%の児



注：観測値数は5004。

図1 マスクの着脱意向に関する回答の分布

童が好意的に回答していた。

次に、学校における感染対策の程度を測定するために、マスクの着脱に関する指導の状況を尋ねた。具体的には「先生から以下の学校の時間について「マスクを外しても大丈夫だよ」と指導されたことが最近1週間の間にあったか」という聞き方で、個別の授業時間について尋ねている。調査当時は、マスクによる熱中症の危険等が報道されていたこともあり、体育の時間では55%の児童が先生からマスクを外してもいいと指導を受けたと回答した。また音楽の時間では19%、座学の時間では6%がそうした指導を受けていた。当時、厚労省アドバイザーリーボードのメンバーである国際医療福祉大学の和田耕治教授は「屋外・屋内を問わず、マスクをしなくて良い場面がある」と指摘しており、そうした場面の一つとして「黙って聞く講義」を挙げている¹⁾。そうした専門家の意見

も広まっていたことから「座学の時間」でもマスクを外して良いと指導する先生がいたのかもしれない。

そのほかの基本属性については、学級の人数は33人、女性校長の割合は16%であった。

Ⅳ 学校生活の満足度と感染症対策

それでは、学校の感染症対策は児童の学校に対する満足度にどのような影響を与えているのだろうか。ここでは、都道府県固定効果を制御した回帰分析を行うことで相関関係を確認した。結果は表3にまとめた。表3の1列ではアウトカムを学校生活全般に関して「すごく楽しい」もしくは「楽しい」と回答した児童を1、それ以外を0とする2値変数を作成し、その変数に影響を与える要因を調べている。結果を確認すると、「マスクに関する

¹⁾「特に応援したいのは子どもたちの場面である。マスクを着用した顔しかお互いに知らないということもある。学校活動でも屋外での体育や休み時間、教室でもあまり話をしないような場面では外せることもある。」(和田2022)。

表2 記述統計量

	平均	標準偏差
すごく楽しい/楽しいと回答した子どもの割合		
a. 学校生活全般	0.75	0.44
b. 授業中（国語や算数・数学などの座学の時間）	0.46	0.5
c. 授業中（体育の時間）	0.54	0.5
d. 授業中（音楽の時間）	0.49	0.5
e. 給食やお弁当の時間	0.63	0.48
先生から以下の学校の時間について「マスクを外しても大丈夫だよ」と指導されたことが最近1週間の間にあったか		
a. 授業中（国語や算数・数学などの座学の時間）	0.06	0.24
b. 授業中（体育の時間）	0.55	0.50
c. 授業中（音楽の時間）	0.19	0.39
d. 登下校中	0.23	0.42
aからdの合計値（マスクに関する指導スコア）	1.03	1.06
脱黙食/黙食ではない通常の昼食をとっているか（はい=1）	0.07	0.26
基本属性		
子どもの年齢	13	6.58
子どもの性別（女児=1）	0.49	0.5
回答者（保護者）の学歴	0.52	0.5
回答者（保護者）の性別	0.43	0.5
子どもの学級における女の子の割合	0.49	0.16
クラスサイズ	33.22	10.32
校長先生の性別（女性=1）	0.16	0.37

注：観測値数は5004。

指導スコア」の係数は0.054であり統計的に有意となっている。「マスクに関する指導スコア」は学校における4つの場面（座学、音楽、体育、登下校）でマスクを外しても良いと指導を受けた（＝1）と答えた合計数であることから、より多くの機会でもマスクを外すように指導を受けることは、児童の学校生活に対する満足度を引き上げる効果があると解釈できる。

そのほかの属性については、多くの変数は統計的に有意ではなかったが、クラスサイズは正の、子どもの年齢は負の相関を示していた。子どもの年齢が負の相関を持つことについては、より年長の児童になるほど学校に満足しなくなっていることを反映しているとみられる。

2列から4列は、座学、体育、音楽の時間が楽しいかどうかをアウトカムとしているが、結果はほぼ同様であり、マスクに関する指導スコアは児童の満足度と正の相関を示していた。5列は昼食の

時間の満足度の結果であり、この推定では「黙食ではない通常の昼食」を行っている児童では大幅に満足度が上昇した。係数値は0.135で統計的に有意となっていることから、黙食をやめることで給食の時間が楽しくなる児童が13.5pp上昇している。

こうした推定を因果関係として解釈できるかについては、地域の感染状況が児童の満足度に与える直接的な影響をどう考えるかに依存する。学校は感染状況によって感染対策を変えるため、感染が収束している地域では黙食が取りやめられたり、マスクを外しても良いと先生が指導する確率が上昇すると考えられる。しかし、感染の収束はそれ自体として児童の心理に好ましい影響を与えるはずだと考えられるため、本研究のような回帰分析は感染対策を緩める効果を過大に推定するはずである。こうした限界はあるものの、推定では都道府県の固定効果を制御していることから、都

表3 学校生活の満足度と感染症対策

	学校生活全般	座学の時間	体育の時間	音楽の時間	給食の時間
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
黙食ではない昼食	-0.009	-0.008	-0.007	-0.009	0.135***
	(0.025)	(0.019)	(0.029)	(0.027)	(0.021)
マスクに関する指導スコア	0.054***	0.044***	0.067***	0.053***	0.048***
	(0.006)	(0.008)	(0.007)	(0.008)	(0.005)
校長先生の性別（女性=1）	-0.006	-0.021	0.011	0.012	-0.012
	(0.018)	(0.020)	(0.020)	(0.020)	(0.020)
クラスサイズ	0.001+	0	0.002***	0	0
	(0.001)	(0.000)	(0.001)	(0.001)	(0.001)
子どもの学級における女の子の割合	0.027	-0.058	-0.011	-0.101*	-0.034
	(0.052)	(0.047)	(0.038)	(0.051)	(0.052)
子どもの年齢	-0.007*	-0.025***	-0.031***	-0.032***	-0.019***
	(0.003)	(0.003)	(0.003)	(0.004)	(0.003)
子どもの性別（女児=1）	0.011	0.024	-0.100***	0.147***	-0.004
	(0.018)	(0.017)	(0.016)	(0.016)	(0.011)
回答者（保護者）の学歴	0.002	0.058***	0.011	0.025+	-0.007
	(0.017)	(0.017)	(0.013)	(0.013)	(0.015)
回答者（保護者）の性別	0.032*	-0.024	0.001	-0.022	-0.090***
	(0.015)	(0.017)	(0.017)	(0.016)	(0.020)
観測値	5004	5004	5004	5004	5004
決定係数	0.033	0.046	0.075	0.078	0.044

注：最小二乗法による推定。表中の変数のほかに都道府県固定効果は制御されている。カッコ内は都道府県でクラスターされた標準誤差。+ $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

道府県レベルでの感染症の流行状況の影響は取り除かれている。加えて、「黙食の廃止」が満足度と与える影響が「給食の時間」のみに観察されていることも興味深い。もし、感染症の収束状況による直接的な影響による交絡が大きいならば、すべての推定で「黙食の廃止」は児童の満足度と正の相関を持つと思われるからだ。以上の考察を踏まえると、本研究で制御されていない交絡要因によって「みせかけの相関」が生じているというより、感染対策を先生や学校が緩めることを原因として、子どもの学校生活に対する満足度が上昇すると解釈できるだろう。「学校が楽しい」ということは子どもの健全な発達の観点からも重要であり、感染対策がそうしたメリットとのトレードオフになっていることが改めてデータで確認できたと考えられる。

V マスクの着脱と先生の指導の関係

3節で確認したように、子どものマスクに関す

る着脱の意向は「これからもずっと外したくない」という意見と「外したい」という意見に2分されていた。そこで、先生のマスクに関する指導と子ども着脱の意向がどう関連しているのかについても解析を行った。

解析を行う前に、若干の仮説を述べると、こうした行動の検証は説得に対して我々がどう反応するのかに関する学際的な研究分野の知見と関係がある。マスクの着用は特に学校生活において徹底的に遵守されていた慣行であり、子どもたちの間でも着用に関する肯定的な信念が形成されている側面がある。こうした信念を覆すような説得が行われる場合、説得に応じる場合と、逆に「外したくない」という意向を強めてしまう場合がある。後者のケースはいわゆるBackfire効果として知られている。例えば、(Nyhan & Reifler, 2015) では、季節性インフルエンザのワクチンについて、副作用の懸念を表明している人たちにワクチンの安全性についての情報を与えたところ、接種意向が逆に減退してしまったと報告している。マスクにつ

表4 マスクの着脱意向と先生の指導

	「外したくないスコア」 (1)	「外したいスコア」 (2)	「外したくないスコア」 (3)	「外したいスコア」 (4)
黙食ではない昼食	-0.471** (0.161)	0.530*** (0.156)	-0.482** (0.166)	0.545*** (0.157)
マスクに関する指導スコア	0.084** (0.031)	0.102** (0.038)		
マスクに関する指導（座学の時間）			0.703*** (0.155)	-0.394* (0.159)
マスクに関する指導（体育の時間）			0.163 (0.102)	0.118* (0.058)
マスクに関する指導（音楽の時間）			-0.189 + (0.102)	0.218*** (0.066)
マスクに関する指導（給食やお弁当の時間）			-0.035 (0.084)	0.197* (0.092)
校長先生の性別（女性=1）	-0.041 (0.122)	-0.03 (0.095)	-0.038 (0.122)	-0.032 (0.096)
クラスサイズ	-0.002 (0.005)	0.001 (0.004)	-0.001 (0.005)	0 (0.004)
子どもの学級における女の子の割合	0.007 (0.253)	-0.113 (0.199)	0.032 (0.249)	-0.126 (0.199)
子どもの年齢	0.492*** (0.090)	-0.294*** (0.073)	0.496*** (0.088)	-0.295*** (0.073)
子どもの性別（女児=1）	0.075*** (0.020)	-0.094*** (0.018)	0.071*** (0.020)	-0.091*** (0.018)
回答者（保護者）の学歴	-0.047 (0.103)	-0.086 (0.059)	-0.055 (0.103)	-0.08 (0.061)
回答者（保護者）の性別	0.365*** (0.083)	-0.076 (0.060)	0.371*** (0.088)	-0.096 (0.065)
観測値	5004	5004	5004	5004
決定係数	0.027	0.03	0.029	0.033

注：最小二乗法による推定。表中の変数のほかに都道府県固定効果は制御されている。カッコ内は都道府県でクラスターされた標準誤差。+ $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

いても同様に、感染症の収束とともに着用を緩める措置が今後も行われると思われるが、児童の間ではそうした「説得」の結果として着用の意向が逆に強くなることも考えられる。²⁾

推定に際して、マスクの着脱意向に関する変数として3節で作成した「外したくない」という回答の合計スコアと、「外したい」という回答の合計ス

コアを用いた。学校の感染対策の指標としては、黙食の有無とマスクの着用に関する指導の状況を用いた。推定は都道府県固定効果を制御した最小二乗法で行った。結果は表4にまとめた。表4では1列で「外したくないスコア」、2列で「外したいスコア」の結果を提示している。みると、1列では「黙食ではない昼食」を実施することにより「外し

²⁾ Backfire Effectsを提唱した研究として（Nyhan & Reifler, 2010）がある。イラク戦争時にフセインは大量破壊兵器をもっているかが話題をなしたが、実際にはフセインは大量破壊兵器をもっていなかった。そこでNyhan and Reifler（2010）は共和党支持者にそうした彼らの通念を覆すような「正しい知識」を与えるとうどうなるか実験した。その結果、驚くべきことに共和党員は自分の見解が覆されると「実は大量破壊兵器はある」とより強く信じるようになったという。正しい知識や通念を覆す情報を与えると逆のことを強く信じるようになることはBackfire effectsと呼ばれており、近年盛んに研究されている。ただしレビュー論文としては（Wood & Porter, 2019）があり、彼らによるとBackfire effectsを示唆する研究はそれほど多くなく、全体としては人々は正しい情報を与えるとそれを信じるようになると言われている。

たくないスコア」が低下することが示されている。この点と整合的に、2列では「黙食ではない昼食」によって「外したいスコア」も上昇している。係数値をみても1列では -0.471 、2列では 0.530 であり、これは各変数の平均で評価するとそれぞれ26%と43%の効果となった。黙食の廃止は「マスクを外す」ように誘導する強い効果があると言えそう。一方、「マスクを外す指導」の効果は一樣ではない。「マスクに関する指導」スコアの効果は1列で 0.084 、2列で 0.102 となっており、2列とも統計的に有意となっている。この結果は、先生による「マスクを外しても良い」という指導が「マスクを外したくない」という児童と「マスクを外したい」という児童を両方とも増加させることを示している。マスクの着脱については半分程度の児童が「いつか外したいが今ではない」と答えていることを踏まえると、そうした態度を決めかねている児童が両極端な考えを持つようになったとみられる。

3列と4列では、こうした結果をより詳細にみるために、個別場面における「マスクに関する指導」の効果を確認している。3列をみると、音楽の時間にマスクを外しても良いと指導することは子どものマスク着用意向を弱める一方で、座学の時間では「マスクを外しても良い」という指導がむしろ「マスクをずっとつけていたい」という児童を増やしてしまうことが確認できた。「座学の時間」においてマスクを外しても良いと指導を受けていたのは全体の6%の児童であることから、わが国の常識に照らしてみても先鋭的なマスクに関する指導を行った場合には、児童がよりマスクの着用意向を強めてしまうのかもしれない。こうした反応は、ある種のBackfire効果とみられ、今後より詳細な検証が必要かもしれない。

4列でも3列の結果と同様に、「座学の時間」の指導の係数は -0.394 で統計的に有意であり、やはり座学の時間における先生による「マスクを外しても良い」という指導は児童にとっては逆効果であることが示唆されている。一方、音楽や体育などの時間については、指導を行った場合には「マスクを外したい」と考える児童が増えた。

そのほか、着脱について顕著な結果がみられたのは、子どもの年齢と性別だった。年齢が高まるほどマスクを外したくないと考える児童は増加し、女兒の場合には7ppほど「これからもずっと外したくない」と考える児童が多かった。

次に、性や学年によってマスクに対する考え方が異なる点を確認されたことから、性別と学年別のサブサンプル解析を行い、結果を図2にまとめた。図2に学校や先生による感染症対策関連の指導の効果をみるために、各変数の係数と95%信頼区間を提示している。結論としては、各サンプルで顕著な結果の相違は確認できず、いずれのサンプルにおいても、黙食の廃止は「マスクをずっとつけていたい」と考える児童を減らす一方で、座学の時間の指導は「マスクをずっとつけていたい」と考える児童を増加させた。

Ⅵ おわりに

本論文では、コロナ禍の子どもたちの日常性の恢復を考える上での基礎的資料として、学校の感染対策や子どもたちの学校生活の満足度に関する独自調査の基礎的な解析結果をまとめた。得られた知見としては3つある。まず第一に、長らく続いたコロナ禍の影響として、「これからもずっとマスクをつけていたい」という児童の割合は場面によっては30%に上ることが明らかになった。これは、コロナ禍ではじまった新しい生活様式が子どもたちに定着していることを示している。次に、マスクの着用などの感染対策を緩める施策は子ども達の学校生活への満足度を高める効果を持っていた。最後に、「座学の時間」において「マスクを外しても良い」と先生から指導を受けた場合には、先生の意思に反してマスクの着用意向がむしろ上昇するようだった。この結果は、子ども達の間に感染対策が既に習慣として根付いていることを前提に、学校における感染症対策の在り方やコロナ禍の収束に向けた日常性の恢復について考える必要があることを示しているだろう。

なお、本研究の限界として、アンケート調査に基づく結果であるために、代表性が必ずしも担保

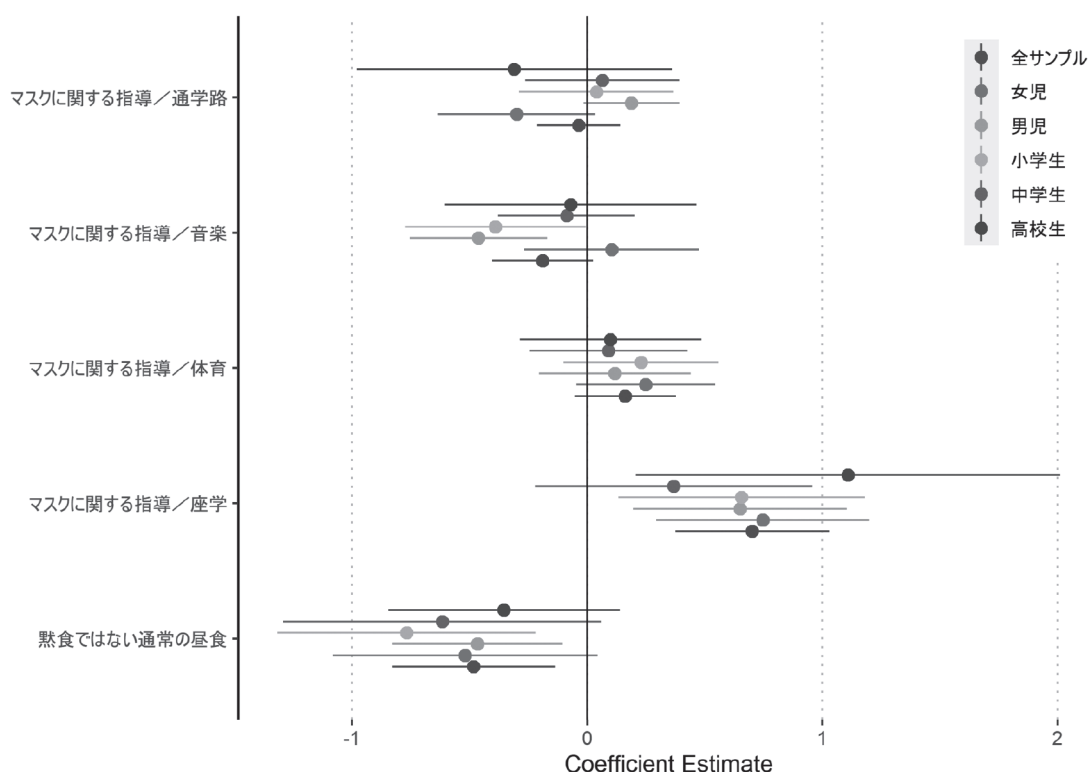


図2 サブサンプル解析の結果：「外したくないスコア」

されていない点があげられる。今後、感染症対策の在り方については多様な意見があることを前提とすると、当事者を含めた形での意思決定（および意見の集約方法の模索）が望ましく、その観点からもこうした調査がより大規模に、代表性が担保された形で実施される必要があるだろう。

謝辞

本研究に際して、一橋大学HIAS Healthから賞金提供を受けた。加えて安中進氏（弘前大学）の有益なコメントに感謝する。

<参考文献>

Abaluck, J., Kwong, L. H., Styczynski, A., Haque, A., Kabir, M. A., Bates-Jefferys, E., Crawford, E., Benjamin-Chung, J., Raihan, S., & Rahman, S. (2022). Impact of community masking on COVID-19: A cluster-randomized trial in Bangladesh. *Science*, 375 (6577), eabi9069.

Asakawa, S., & Ohtake, F. (2022). *Impact of COVID-19 School Closures on the Cognitive and Non-cognitive Skills of Elementary School Students*. Research Institute of Economy, Trade and Industry (RIETI).

Budzyn, S. E., Panaggio, M. J., Parks, S. E., Papazian, M., Magid, J., Eng, M., & Barrios, L. C. (2021). Pediatric COVID-19 cases in counties with and without school mask requirements—United States, July 1–September 4, 2021. *Morbidity and Mortality Weekly Report*, 70 (39), 1377.

Fukumoto, K., McClean, C. T., & Nakagawa, K. (2021). No causal effect of school closures in Japan on the spread of COVID-19 in spring 2020. *Nature medicine*, 27(12), 2111–2119.

Global Monitoring of School Closures caused by COVID-19 Pandemic - Dashboards - Covid-19 Response. (日付なし). 読み込み 2022年9月25日. から <https://covid19.uis.unesco.org/global-monitoring-school-closures-covid19/>

Iwata, K., Doi, A., & Miyakoshi, C. (2020). Was school closure effective in mitigating coronavirus disease 2019 (COVID-19)? Time series analysis using Bayesian

- inference. *International Journal of Infectious Diseases*, 99, 57-61.
- Krishnamachari, B., Morris, A., Zastrow, D., Dsida, A., Harper, B., & Santella, A. J. (2021). The role of mask mandates, stay at home orders and school closure in curbing the COVID-19 pandemic prior to vaccination. *American journal of infection control*, 49(8), 1036-1042.
- NHK. (日付なし)。“食べずに見守る” 流しそうめん 新型コロナ感染防止で 津和野。NHKニュース。読み込み 2022年9月25日, から <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200809/k10012560081000.html>
- Nyhan, B., & Reifler, J. (2010). When corrections fail: The persistence of political misperceptions. *Political Behavior*, 32(2), 303-330.
- (2015). Does correcting myths about the flu vaccine work? An experimental evaluation of the effects of corrective information. *Vaccine*, 33(3), 459-464.
- Oikawa, M., Tanaka, R., Bessho, S., & Noguchi, H. (2020). *Do class size reductions protect students from infectious disease? Lessons for Covid-19 policy from flu epidemic in Tokyo Metropolitan Area.*
- Shobako, N. (2022). Lessons from the health policies for children during the pandemic in Japan. *Frontiers in Public Health*, 10.
- Takaku, R., & Yokoyama, I. (2021). What the COVID-19 school closure left in its wake: Evidence from a regression discontinuity analysis in Japan. *Journal of public economics*, 195, 104364.
- Roberts, M., Hsiao, W., Berman, P., & Reich, M. (2003). *Getting Health Reform Right: A Guide to Improving Performance and Equity.* Oxford University Press.
- Wood, T., & Porter, E. (2019). The elusive backfire effect: Mass attitudes' steadfast factual adherence. *Political Behavior*, 41(1), 135-163.

(たかく・れお)
(Wang・Mingyao)

On Children's School Lives After the COVID Pandemic -The Results and Preliminary Analysis of the School Life Survey in June 2022-

TAKAKU Reo^{*1} and WANG Mingyao^{*2}

Abstract

This paper reports the results of an original survey of school infection control measures and children's satisfaction with school life as basic data for considering the restoration of routine in children with the pandemic. The findings obtained are threefold. First, as an effect of the long-lasting pandemic, the percentage of children who said they "want to wear masks all the time from now on" was as high as 30% in some situations. Second, measures to loosen infection control measures, such as removing masks, had the effect of increasing children's satisfaction with school life. Finally, when the teachers instructed the students that they could remove their masks during "classroom time", the intention to wear masks rather increased among some students against the teacher's will. These results would indicate that it is necessary to consider the nature of infection control measures in schools and the restoration of routine, assuming that infection control measures have already taken root as a habit among children.

Keywords : School, Surgical mask, Silent eating, Satisfaction

^{*1} Associate Professor, Graduate School of Economics, Hitotsubashi University

^{*2} Doctoral Student, Graduate School of Economics, Hitotsubashi University